

伊勢の中世

第 2 7 6 号
伊勢中世史研究会
令和2年4月1日発行

事務局：〒515-2321 三重県松阪市嬉野中川町 1524-121 竹田憲治方

メール takeda@zvtv.ne.jp ホームページ <http://mietyusei.bakufu.org/>

松阪市曲町のごきげんさん

本稿は令和2年2月16日（日）に行われた松阪市曲町の「ごきげんさん」について、筆者が見学および聞き取りした神事の内容をまとめたものである。

1 曲集落の概要

曲集落は現在の行政区分では三重県松阪市に属し、松阪市役所から西方に約3kmの距離にある。集落は堀坂山から発した堀坂川左岸にある。集落には氏神社の満賀里神社および檀家寺である曹洞宗長照寺と同宗天徳寺がある。本神事は曲自治会と出曲自治会で行われており、曲自治会はおよそ130世帯で、茶屋上組、茶屋中組、茶屋下組、樋口上組、樋口下組、北世古上組、北世古下組、南世古上組、南世古下組、徳尾組の10組で構成されている。出曲自治会はおよそ40世帯、2組で構成されている。

2 神事の時期および構成

神事はかつて2月22日に催行されていたが、現在は2月22日に近い日曜日に行われている。神事の起源等の詳細は不明な点が多い。

神事は満賀里神社の氏子総代ら神社関係者と、曲自治会の10組と出曲自治会2組の各組から選出された宮世話を中心に行われ、宮世話の役は組内で輪番である。神社には宮司は常駐しておらず氏子のみで神事は進められる。また自治会役員の関与は薄い。

舞は獅子1名、天狗1名、後持ち（案内・尻尾持ち・尻もちとも）1名の3名で行われ、自治会の各組が輪番で担う。今年は南世古組が当番であった。舞には笛や太鼓などはない。

本神事とは別にかつては1月に自治会により満賀里神社において伊勢太神楽系の獅子舞も奉納されていたそうであるが、今は行われていない。

3 神事の内容

<神事の準備>前日午後5時

神事の前日に氏子総代らによって満賀里神社の庫裡に保管された獅子頭が社務所へ移され、獅子頭が大狗面とともに安置され、御神酒などがあげられる。獅子頭の背後には「タマ」と呼ばれる指物が3本置かれる。指物は笹竹を用い、正面向かって左より巻き藁に半

紙へ鬼の顔が描かれたもの、中央には半紙に宝珠が三つ描かれたもの、右には枝葉のついた笹竹の先端に紙垂を付けている。絵と紙垂は長照寺住職に依頼するという。

この準備の際に各組の宮世話より今年度のごきげんさんの希望宅の報告があり、集計に基づいて翌日の催行順序が決められる。

<前夜祭>午後6時30分頃

長照寺住職により祈祷を受ける。祈祷では獅子頭に金剛波羅密経と消災吉祥陀羅尼が誦読される。

<神事当日>当日午前8時

関係者らが社務所に参集し、舞を担う3名は装束等の準備を行う。

<満賀里神社>午前9時

社務所を出てまず満賀里神社境内で舞われる。舞は獅子の裾をつかんだ天狗の先導で行われる。天狗が「あーごきげん、ごきげん、ごきげん」と扇子を仰ぎながら三度言って三歩前進する。獅子は天狗に合わせて口を三度開口し歯音を立てながら三歩前進する。この所作が三度繰り返される。

舞が終了すると獅子一行は長照寺へ向かうが、氏子総代や宮世話は同行しない。

<長照寺>午前9時15分頃

長照寺では本堂へ舞はなく、同寺境内の観音堂にのみ舞が行われる。所作は同じである。

<吉田氏宅前>午前9時20分頃

次に曲自治会樋口上組の吉田氏宅前で舞が行われる。吉田氏での舞は毎年必ず行われており、集落では獅子が生まれた場所との言い伝えがあるという。舞の所作は同じである。かつては吉田氏宅での舞の前に、集落西端で深長町との境にあたる一本松の辻でも舞が行われたという。満賀里神社、長照寺、一本松、吉田氏宅での舞は毎年実施され、舞の順番が決まっている。この後の巡行についてはその年の希望者により行程は毎年変わる。

<各戸での舞（曲自治会）>午前9時30分頃～

家族の内で厄年にあたる人がいる場合や新築など前日までに希望があった家を巡る。今年も曲自治会で3軒であった。舞は家の玄関先で同様の所作が行われる。その後、舞の奉納を受けた家より獅子に対して供応がある。まず天狗による毒見の後、獅子の口中に酒食が入れられる。この後、舞手らも供応を受ける。最後にもう一度玄関先で舞が行われる。

当神事に用いられる獅子頭は鼻先を中心に上顎部分が著しく損傷している。これはかつて獅子が集落を巡行する際に、厄年の者が各戸の厄を飲み込んだ獅子頭を日本刀で切りつけたことによるもので、おびただしい刀傷の痕跡が残っている。現在では行われていない。獅子は各戸の舞に関係なく、集落を巡りながら集落の厄を祓うとされている。

<獅子塚>午前10時40分頃

曲自治会での舞が終了すると、獅子一行は隣接する船江町との境（松阪中央病院北側）へ向かう。農道脇にわずかに小高いマウンドがあり、地元で獅子塚と呼ばれている。集落で集められた厄を捨てる場所だという。伝承では江戸時代に船江の住民と厄の扱いを巡っ

て争いがあったそうである。獅子塚には前もって「タマ」と呼ぶ3本の指物が刺し立てられていた。かつては集落を巡行する獅子とともに指物も移動したそうであるが、各戸での供応が多かった時代に関係者らが「タマ」を忘れることがあったため事前に指しておくようになったそうである。獅子塚に対しても舞が行われる。

<各戸での舞（出曲自治会）>午前 11 時頃～

出曲自治会でも希望宅で舞を奉納し、集落を巡行して厄を祓う。出曲自治会での舞は1軒であった。

<獅子塚>午前 11 時 15 分頃

最後に再び獅子塚へ戻り、出曲自治会の厄を捨て、舞を奉納し神事は終了である。獅子塚に指された「タマ」はそのまま置いて帰る。

4. 獅子頭について

神事に用いられる獅子頭は管見のかぎり銘文は確認できなかった。獅子頭を計測することはできなかったが、面高に対して奥行が長い。黒漆地であるが、既述のとおり無数の刀傷があり木地が大きく露呈している。目の周囲と口元は赤漆、黒目部分は黒漆で表現され中央は穿孔されていて内部から外側が見られるようになっている。白目部分は金箔である。鼻の形状は欠損が大きく鼻穴は猪目形である。上唇と下顎に刻みはなく側面の口元にのみ2条の刻みがある。頬部には耳元にかけて巻毛を表現すると思われる浮彫が見られる。歯は犬歯がなく、前面が上下8本、側面が上下7本で、歯は平坦である。眉毛の形状は弓形で、黒漆で塗られている。頭頂部には宝珠が装着されている。下顎下部はくり抜かれ把手状になっている。

獅子頭とともに天狗面も伝わるが、銘文は確認できなかった。獅子頭を納める木箱には「弘化元年辰冬求焉 / 曲邑 守護之者矣」と墨書された木板が蓋の内側に取り付けられていた。関係者によれば、この箱には元は神楽用の獅子頭を収納しており、当獅子頭とは関係がないと伝聞されているとのことであった。ただし、木箱は再造されたもので収納状況について幾たびかの変遷が考えられること、本獅子頭の造容が周辺に伝来する獅子頭に比して簡素であること、墨書の文言が本神事の性格と合致するため、本獅子頭制作年代が弘化元年（1844）の可能性も排除できないと思われる。

まとめ

ごきげんさん神事は舞振りこそ素朴なものであるが、集落を巡行して災厄を祓い、集落の境界（獅子塚）に災厄を捨てるという一連の流れがよく残されている。こうした特徴は三重県南勢部で1月～2月頃に各地で催行される獅子頭を用いた神事と比較しても集落の災厄を祓うという点で共通する。

ごきげんさん神事の特徴は、「タマ」と呼ばれる3本の指物で、近年では獅子の巡行に先だつて獅子塚に刺し立てられるとのことであるが、本来は獅子とともに集落を巡ることで

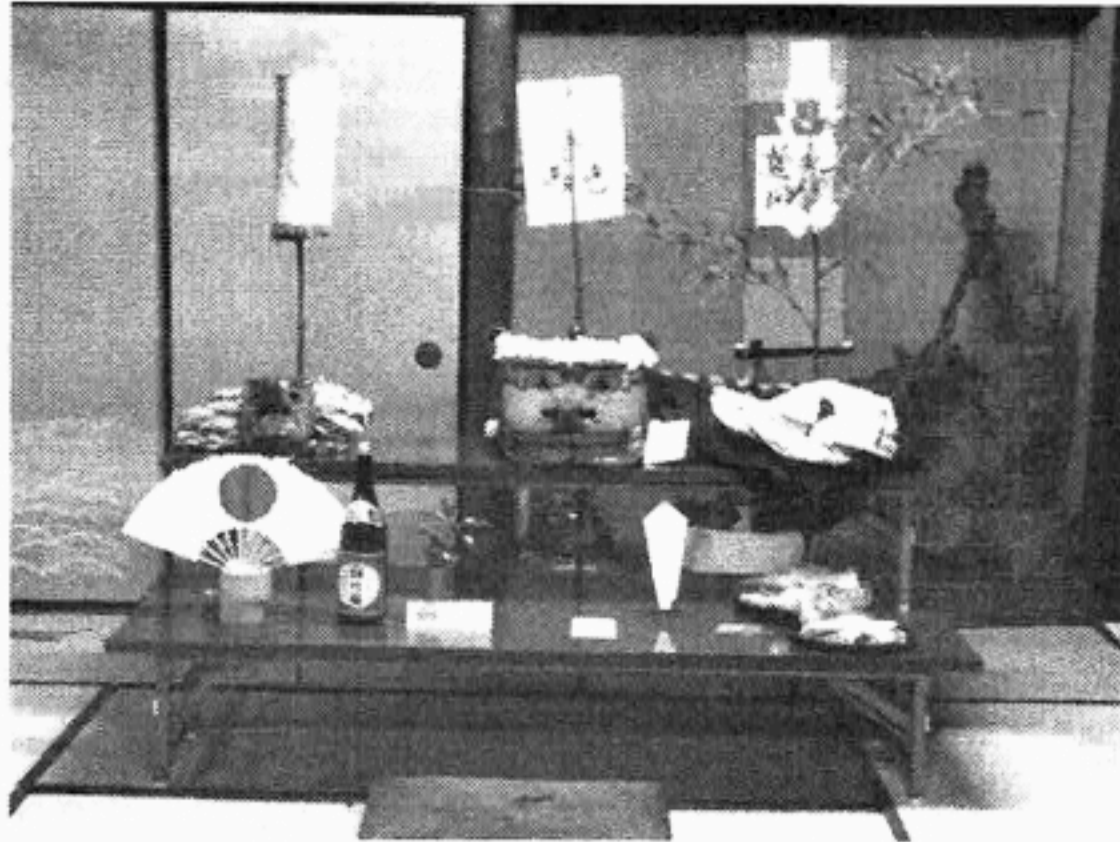
集落を除災するとともに、獅子によって獅子塚に集約された厄を村の境界地に封じ込めるものであったと考えられる。神事では神職の関与が希薄な一方、長照寺住職より読経を受けて法力を授かる点や「タマ」に鬼絵や宝珠絵が描かれるなど仏教的要素も認められる。獅子への読経は玉城町宮古や山神などでも見られる。

また、曲町周辺の集落でも2月にそれぞれの集落で獅子頭を用いた神事が行われている。岩内町の「どこんのり」や美濃田町の「すすき倒し神事」などが該当する。これらの神事は各集落で完結するものであるが、集落の厄を下（堀坂山から伊勢湾に向かって）の集落へ順番に流すという広域的な関係性も見られる。

住民の獅子頭の扱いという点については、かつては獅子そのものを日本刀で実際に切ることで災厄を祓っており、南勢部に多く分布するオカシラサンへの神聖視する点と異同が認められる。実際、本神事では「オカシラサン」という呼称は聞かれなかった。

最後に本報告の作製にあたり神事関係者をはじめ曲自治会および出曲自治会の方々には大変なご協力をいただくとともに多くの貴重なご教示をいただきました。末筆ながら記して深謝申し上げます。

(味噌井 拓志)



社務所に安置された獅子頭



獅子頭への読経



獅子頭



満賀里神社での舞



長照寺観音堂への舞



吉田氏宅前での舞



個人宅への舞



獅子へのもてなし



個人宅で頭を噛む獅子



獅子塚への舞



ごきげんさん関連位置図

(国土地理院提供)